

眞宗信者の社会的態度

——質問書法による調査を基礎として——

西 光 義 敏

一 は じ め に——本研究の目的・資料・方法——

現代に生きる眞宗信者は、社会問題に対していかなる態度をとっているか、又その態度の特徴や諸相はいかなる内的原因や外的条件によつて規定されているか。本論文はさゝやかな調査がとらえ得た限りの資料に基いて、右の大きな課題の一斑を考察してみようとするものである。資料とは、昭和三十一年八月より昭和三十三年五月までの十ヶ月にわたり、全国眞宗篤信者に十四頁、十五項目よりなる「信仰に関する調査」質問書⁽¹⁾を發送して得られた三〇四名（男二〇〇名、女一〇四名）の回答中、戦争、再軍備、憲法改正、支持政党等の諸問題を中心にして、念仏者の社会的態度を問うた項目⁽²⁾に対する回答である。こゝに言う眞宗信者とは「性別・派別・年令・職業・学無学・僧俗に拘らず、親鸞によつて開顕せられた念仏の教を自覺的に求めるか、或はそれによつて生かさるゝ者」を意味し、調査も、対象を特にそのように限定して進めた。

回答者の内容を簡単に示すと（第I表参照）

第Ⅰ表 回答者 304人 (男 200人, 女 104人) の内容

(3) 居 住 地 (最も長く住んでいた場所)

村 落 (農・山・漁村 鉱業地帯)	173人	56.9%
都市 (住宅地, 商店 街, 工場街等)	118	38.8
中 間 地 帯	10	3.3
不 明	3	1.0

(4) 学 歴

無 学	5人	1.6%
寺 小 屋	2	0.7
義 務 教 育 程 度	118	38.8
旧中等学校程度	73	24.0
旧大学・高専程度	72	23.7
そ の 他	4	1.3
無 記 入	30	9.9

1. 義務教育程度とは、尋常小学校、高等小学校、新制中学校
2. 旧中等学校程度の中には、旧制乙種實業学校、青年学校、新制高校、及び中退、四修等をもふくむ。
3. 旧大学・高専程度の中には、師範学校及び仏教関係専門学校（学林・学院・学寮等）をふくむ
4. その他とは私塾等

(1) 年令10才～90才 (平均年増51才)

年 令	人 数	百分比
20才以下	3人	1.0%
21才～30才	39	12.8
31 ～04	41	13.5
41 ～50	51	16.8
51 ～60	63	20.7
61 ～70	56	18.4
71 ～80	30	9.9
81 ～90	6	2.0
不 明	15	4.9

(2) 地 域 (39都道府県)

福井31, 兵庫30, 京都26, 大阪23, 奈良20, 滋賀19, 広島18, 和歌山14, 福岡10, 愛知, 新潟, 三重各 9, 島根, 北海道各 8, 佐賀, 石川各 6, 山口, 岐阜, 宮城各 4, 福島, 山形, 長野, 大分各 5, 群馬, 鳥取, 宮崎, 熊本各 2, 青森, 栃木, 埼玉, 千葉, 神奈川, 静岡, 愛媛各 1

(6) 宗 派（家庭の宗教）

真宗	西本願寺派	56.9%	88.2%
	東本願寺派	24.0	
	高・三・興・仏 ・出派	7.3	
	真宗とのみ書いた者		
浄土宗			3.9
禪・真言・日蓮・天台・その他			7.9

(5) 職 業

農 林 業		36.2%	
中 小 商 工 業		11.8	
給 料 生 活 者		11.2	
宗 教 家		10.2	
無 職	老 人	6.3	17.4
	主 婦	5.3	
	療養者	2.6	
	その他	3.2	
教 員・教 授		4.3	
医 師・薬 剤 師		3.3	
個 人 経 営 者		1.6	
そ の 他		2.3	
無 記 入		1.6	

(7) 生活程度

非常に裕福	0.3%
余裕がある	5.9
普 通	70.7
余裕がない	17.1
非常に苦しい	3.0
無 記 入	3.0

- 給料生活者とは、会社員、公務員、銀行員等
- 宗教家とは実質的には僧侶（うち教員をかねる者3人）、坊守、寺院出身の仏教関係大学学生である
- その他とは自由業及び上記いずれにも分類しがたいもの

4	3	2	1
学	居 住 地	地	年
歴……義務教育終	……だいたい村	域……北海道から	令……満年令で一
六九	落六、都市	鹿兒島に及	九才より九
	四の割合。	ぶ三九の都	○才まで、
	四％）。	道府県であ	平均年令五
	地方が中心	るが、近畿	一・○才。
	になる（全	道府県であ	
	体の四六・		

了程度が約四割、旧中等学校卒業程度が二・四割、旧大学高専卒業程度が二・四割弱をしめる。

5 職 業……農業従事者三六%を筆頭にはほとんどあらゆる職業階層にわたっているが、組織労働者（給料生活者がほゞこれに当る）が比較的少く、漁業従事者は皆無であつた。

6 所属宗派……家の宗教は半数以上が西本願寺派に、約四分の一は東本願寺派に所属する。眞宗以外の者も一割あまりあるが、仏教外は金光教一人のみ。

7 生活程度……七割が経済的に普通程度の生活を送っている。

三〇四名という標本数は決して多くはないが、右によつて見ると、本調査によつて得られた資料は全国眞宗信者の現実の姿をほゞ公正に代表しているように思われる。

註

(1) 質問書法 (Questionnaire) の長所、短所については、宗教心理学の分野において色々に論ぜられているが、本調査では少しでも欠陥を除去して、正確な資料を得るために、次のような配慮をなした。

イ、責任ある回答を得るために住所・氏名・年齢・職業を明記してもらつた。

ロ、肝要な問題に関してはチェック式設問のみならず、自由な具体的意見や感想を記入してもらつたようにした。

ハ、宗教経験を各面から明らかにしうるよう設問を多角形的、立体的にした。

ニ、設問が多いことは、回答者を学力ある信者のみに限りやすくなるので、面接法を併用して高齢者、無学者の信者の回答を得ることに努力した。

ホ、調査がいかなる意味に於ても一方に偏らないように留意し、次のごとき各方面のルートによつて調査書を配布した。各本願寺教学部、龍谷・大谷大学諸教授、龍大学生、熱心な全国住職、布教師、諸種信仰雑誌に寄稿回数が多い学者や信者、眞宗グループをもつ療養所、知人等。

協力を賜つた数知れぬ方々にこの場所を借りて甚深の謝意を表する。回収率は三〇・四%である。

(2) それは次のような設問からなつている。

十二

1 念仏者は社会問題に対してどんな態度をとるべきでしょうか。あなたの御意見に○をおつけ下さい。

イ、社会問題解決に努力すべきだ。

ロ、社会問題に心をよせるべきではない。

ハ、わからない。

ニ、その他。

2 右の御意見をあなたはどのように実践していますか。

3 次の中あなたの御意見に○をおつけ下さい。

イ 戦争

賛正

反対

わからぬ

ロ 再軍備

賛正

反対

わからぬ

ハ 憲法改正

賛正

反対

わからぬ

○をつけた理由

4 あなたは現在の政党のどちらをえらびますか。○をつけて下さい。

イ、保守党

ロ、進歩党

ハ、どちらになつても同じ

ぬ ヘ、その他

ニ、関心がない

ホ。わから

○印をつけた理由

二 社会問題に対する態度

「念仏者は社会問題に対してどんな態度をとるべきでしょうか」と問うと、六割が「社会問題解決に努力すべきだ」と答え(第Ⅱ表参照)、その中六九%が自分の具体的な実践や意見を記している。それによると、次の如き傾向が全体を通じて顕著に見られる。

1 社会問題という言葉を、政治的な諸問題と受けとつている者がきわめて少ない。

2 従つて「社会問題解決のための実践」という言葉を、信仰運動或は信仰に基盤をおく生活という意味——むしろ宗教的実践に近い意味——に使用している。

3 その実践が第一次集団内に於てや、自己の職業を通じては甚だ積極的に行われている。

4 実践の主体である自己に対してきわめて内省的である。

右の諸点をもう少し詳しく説明しよう。「念仏者は社会問題に心をよせるべきではない」(五・三%)という意見や、その他の意見(八・九%)の人達も、「政治・経済的な諸問題という意味の社会問題なら、念仏者なるが故に特に解決に努力すべきである、とは思わない。それより念仏者は信仰をすゝめることに努力すべきだ。それが究極的にあらゆる社会問題の解決になる」と言おうとしている。つまり実質的には「解決に努力すべきだ」という多くの人達と考えは変らないことになる。真宗信者の社会意識の中核をしめるのは、弥陀の本願にめざめな

い世人に対する心の痛みと、そこからあふれ出る教人信の意欲である。社会問題はすべて信仰を中心として考えられている。

「一人一人が真の信仰をもつていたゞくことが社会問題の根本的解決になる」と思い、一人でも聞いてくれる人のふえるように努力している」(五〇才・男・薬剤師)、「念仏の力で社会をおさめたい心でいつぱい」(六八才・男・農業)等の意見があらゆる年令、階層の信者によつて力強く述べられている。一言にして言えば「社会問題解決の根本は念仏の信に在る」(六九才・男・大学教授)という基本的信念が、多かれ少なかれ真宗信者の社会的態度と実践とを特徴づけているのである。

第Ⅱ表 社会問題に対する態度

解決に努力すべきだ	183人	60.2%
心をよせるべきでない	16	5.3
わからない	35	11.5
その他	27	8.9
無記入	43	14.1

教人信の実践は、それぞれの環境・地位・職業・能力に応じて、身近かな所から熱心に行われている。仲好会を作つて仏法を弘める菓子屋、文筆を通して信仰を説き、仏教の立場から社会問題を批判する学者・詩人・ジャーナリスト、社会事業団に報謝する商人、日々の新聞、ラジオのニュースを材料にして信仰を説く僧侶、仏青運動に若い情熱を傾ける労働者や公務員、仏教婦人会を指導する坊守、不幸な人達に仏教の人生觀をもたせようと努める農民、家庭問題や離婚問題の解決に念仏の立場から助言を与える老人、児童の宗教情操涵養に最大限の努力を払い、同僚や保護者に法悦をわかち教員等々。信者の積極的な伝道実践の事実をつぶさに列挙しうる紙面をもたぬことを私はうらみとする。

社会的実践の必要性は痛感しつつ、具体的に実行に移していない身をふりかえつて慚じまた歎く者も多い。家庭の主婦と働きざかりの給料生活者の中にそれが多い所から、境遇的な原因が考えられるが、もう一つは信者の内省の深さにもよう。

総じて真宗信者の内向的な心理傾向は十分注目値する。彼等の社会的態度の上にもそれが、例えば次のような形であらわれてくる。

「自信教人信。まず自分が指導するという態度は憍慢になつて反感を買うことになるので、自分が聞法して行くそのまゝが教人信になり、社会問題解決に自然になると思う」（二三才・男・僧侶、すなわち

(1) 真宗信者の社会的実践は教人信になればならぬ。

(2) 教人信は本質的には自信の問題である。

(3) だから社会や他人を言う前に、私が聞法し念仏に生かされることが肝要である。

こういう自己反省の内向的、求心的方向は一部の人を除いて多くの信者の一般的傾向である。社会問題をも信仰を

基調として考え、問題解決を常に自己の中に求めていくという性格は、優れて真宗的であるということに誤りはないが、しかし又これが現実の上では、往々にして真宗信者の信仰生活を個人の心理的な味わいの領域内におしとどめ、積極的行動に出でしめない原因になつてゐる面もある。この点については後に具体的資料によつて再論することとする。

三 戦争・再軍備・憲法改正・政党に対する態度

さて、教人信活動という意味でなく、一般的な意味の社会問題、特に現代人共通の課題となつてゐる戦争、再軍備・憲法改正等に対して、真宗信者はいかなる態度を示すであろうか。又これら諸問題の具体的解決のために、どの政党を支持してゐるであろうか。

まず第Ⅱ表を見ていただきたい。無記入者（一〇・二%）以外ほとんど全部が戦争反対の態度を示すのは当然としても、争戦反対の意志を実現するためには再軍備を是とするか非とするかとなると、念仏者の足なみは全く乱れる。わからない者、記入しない者も急に数を増す。更に憲法改正問題になるとわからない者が二五%にもふえ、無記入者とあわせて全体の約半数にも達する。

今賛否両意見を対照してまとめてみると、

第Ⅱ表 戦争・再軍備・憲法改正に対する態度

(1) 人数比

	賛成	反対	わからない	その他	無記入
戦争	1.0%	86.2%	1.6%	1.0%	10.2%
再軍備	28.6	33.5	14.8	1.0	22.1
憲法改正	26.3	23.0	25.0	3.0	22.7

(2) 年齢比

再軍備	53.9才	47.1才	53.7才		51.6才
憲法改正	55.7	46.5	50.3		51.2才

再 軍 備	賛				成				反		そ の
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	
戦争の為でなく、まさかの侵略に備えて国防・自衛のため	国内治安維持のため最小限に	独立国家として軍備をもつのは当然	国際関係の現状から見てやむを得ない		戦争を放棄した国に軍備は不必要	軍備が逆に戦争誘発のもとになる	再軍備より外になすべき緊急事がある	念仏者の立場（仏法の精神）から	現状では不可能でもあり無意味でもある		1 世相は複雑で、個人の思うように行かぬ 2 意見を述べる資格、能力なし
憲 法 改 正	賛				成				反		そ の
	1	2	3	4	5	6	7		1	2	
米国におしつけられた憲法を返上して、日本の国情に合う憲法を自主的に作れ	再軍備をするために	旧憲法にもどすために	民主主義・自由主義の誤解を是正するため	宗教上の理想（邪教肅正・永久中立等）を実現するために	一部改正の要あり（例えば教育面・国体面・家族制度等）	やむをえない			戦争・再軍備に反対するため	理想的な現行憲法を改正する必要なし	1 現憲法には長短あつて改憲の是非を決することができぬ

他

- 2 意見を述べる資格・能力なし
3 どちらになつても同じ

再軍備問題にしても改憲問題にしても、真宗信者なるが故に必然的に意見や態度を共通にするとは全く言えぬ事実が明らかである。この事実に対する価値判断は自由であるが、真宗信者の社会的態度は、信仰によつて決定される面よりも、信者の個人的、環境的相違にもとづく時代認識の相違や社会分析の浅深によつて性格づけられる面の方がはるかに強いことだけは言える。

こゝでついでに真宗信者の支持政党を調べてみよう（第Ⅳ表）。保守的政党支持者（二三・七％）が進歩的政党支持者（一六・八％）よりはるかに多く、二五・六％即ち四分の一以上が「どちらになつても同じ」「関心がない」と言う。「わからない」「無記入」が二六・九％。真宗信者は政党——従つて政治——に対しては極めて無知・無関心であり、関心ある者の多くは保守党を支持しているわけである。保守政党は漸進主義をとり中正穩健である、国民全体の生活を基調とし實際的である、宗教に関心や理解ある者がその中にいる、伝統を守る、罪業が少ない等が保守政党支持者の理由であるが、彼らの多くは、現在の政党に対して根本的には大きな不信を抱き、支持の仕方も全身的ではない。進歩的政党に対しては、理想論ばかりで実行が伴わない、ソ連の

第Ⅳ表 支持政党

支持する政党	人数比	平均年令
保守的政党	23.7%	57.6才
進歩的政党	16.8	42.6
どちらになつても同じ	17.1	51.2
関心がない	8.5	51.0
わからない	8.5	55.5
その他	7.0	50.1
無記入	18.4	50.4

支配を受け、言行が過激で破壊的である、宗教を理解しない等と批判する。これに対して進歩的政党支持者の支持理由は、進歩党は再軍備や憲法改正に反対している、保守党より人民全体の幸福を考え、常に貧しい者苦しい者の味方である、人類の理想に向つて着々進んでいる、仏教の精神に合致する等にある。彼らは、保守党は利己主義によつて動いているとなじり、その再軍備、改憲的政策を批判している。政党観に於いても同じ真宗信者の中に全く相反する立場が存在していることは、同一信仰に生きるが故に同一の社会解釈や社会的態度がもたらされるとは限らない、即ち真宗信者の社会的態度が信仰によつて決定される力はきわめて弱い事実を、再び実証している。

四 真宗信者の社会的態度の分析

では、同じく親鸞の流れをくむ信者に以上見た如き社会的態度の相違を見るのは何故か。総じて社会問題とくに政治問題に対して無知・無関心な信者層は女性である。それは統計数字の上に明瞭に表われている。被調査者中の女性の比率は全体の三四・二%であるのに、社会問題に対していかなる態度をとるべきかに答えられなかつた者の女性数は五六・四%、再軍備、改憲問題についての設問に対する無回答者中の女性数は夫々四八・五%、五六・二%、更に支持政党に対して答え得ないか、関心のない者の中、五九・三%は女性なのである。けれど現今までの女性の社会的地位に於ては、生活関心が家庭を中心とする狭い範囲内に局限されがちであつたことによるものであろう。

政治的諸問題に対する態度は大きく年齢に影響される。再軍備賛成論者の平均年齢は五三・九才、反対論者は四七才(第Ⅱ表(2)参照)、憲法改正については賛成論者五五・七才、反対論者四六・五才である。更に政党支持者の平均年齢に至つては保守党支持者五七・六才、進歩党支持者四二・六才と実に十五才の年齢差がある。信仰の世界に於ても古い秩序中に安住を見出そうとするのは高齢者、信仰生活を革新的な方向に展開していかうとするのは若い世代とい

う一般的傾向が読みとれる。職業による相違は第Ⅴ表の如くである。概して農林・商工業従事者は保守的・給料生活者や老人・主婦・療養者は進歩的、僧侶は相半ばする。

現代眞宗信者の政治的無関心と保守的傾向は掩うべくもないが、それは信者の属する社会的階層や世代に由来するものであり、時代の進展にともなう女性の社会的地位の向上と、それにもとづく女性の自覚、組織労働者の増加、科学的思考と知識の一般的普及によつて、眞宗信者の社会的態度も刻々革新的、積極的方向に転換して行くことが予想される。「仏教者というものはとかく社会問題に背を向けがちだが、いけないと思う。社会と仏教とは別物ではないのだから」(三三才・男・療養者、高小卒)

「今迄宗教家或は念仏者と言えはほとんど社会問題などにタッチせず、むしろ好んでこれから遠ざかる傾向にあつたが、これは大きな間違いで、正しき信仰を基礎とした社会を作り上げるためにも進んで問題の解決に努力すべきと思う」(三十七才、男、僧侶、中四修)

「女だとひっこみじあんでは大だ。正しいと自信の出来る方に真直に進む」(六一才・女・無職・高女卒)

というような反省と自覚が信者の間におこっているし、平和を愛するが故に戦争の可能性を大きくする再軍備と憲法改正に反対という筋の通つた社会的態度を鮮やかに表示する信者も、数こそ多くないが各層に見られる。公正に見

第Ⅴ表 職業別による社会的態度の相違

問 題 職 業	再 軍 備		憲 法 改 正		支 持 政 黨	
	賛 成	反 対	賛 成	反 対	保守党	進歩党
農 林 業	40.0%	31.3%	41.3%	24.5%	34.1%	15.5%
中 小 商 工 業	14.9	9.0	12.5	6.1	19.7	9.6
給 料 生 活 者	19.4	19.4	17.5	26.5	8.5	36.5
僧 侶	10.3	10.5	10.0	12.2	12.7	13.5
無 職(老人・主婦・療養者)	10.3	15.0	8.8	14.3	9.9	11.5
そ の 他	5.1	14.8	9.9	16.4	15.1	13.4

て、保守的政党支持者よりも進歩的政党支持者の方が積極的な政治的関心を示している。万一今後真宗教団が社会意識にめざめたあらゆる階層への布教に失敗し、真宗篤信者をいつまでも自主的な組織や科学から遠い、いわば取残された階層の中にのみしか求めえぬとすれば、真宗そのものが取残された宗教となり終るであろう。

以上、真宗信者の社会的態度をやゝその外的条件の面に重点を置いて考察してきたが、最後に角度を変えて内なる信仰そのもののとの関連に於て、真宗信者の社会的態度の特性を確かめてみたいと思う。本調査の中、別な箇所では「あなたが固い（本当の）信仰に入られた以前と以後とに、あなたの気持・身体・性格・日常の態度に変化がありましたか」と問い、考え得る信後の変化二二種の中、該当するものにいくつでも○印をつけてもらった。それをまとめたものが第Ⅵ表である。まず多いのが「ますます仏法の話聞きたく思う、聞きあきぬ」七七％、これは「仏法は聴聞にきわまる」という真宗的性格の信者への具現で当然な結果といえる。つゞいて報名報恩、機の深信もしくは罪惡意識、生死問題の解決にともなう歓喜心と、真宗信者としてきわめて自然な結果が明瞭な数字をもつてあらわれ、第六番目に「人にこの信仰を伝えずにはおれない気がする」と、上の五つの自信からあふれ出る教人信仰態度があらわれる。その数一八二人で全体の六割。ところが、信仰のめざめ

真宗信者の社会的態度

第Ⅵ表 信 後 の 変 化

順位	信 後 に お け る 変 化	○をつけた人数	100分比
1	ますます仏法の話聞きたく思う聞きあきぬ	234人	77.0%
2	念仏が自然に口に出る	216	71.1
3	ますます自分のみにくさはずかしさが知れる	215	70.7
4	死に対する不安がなくなった	188	61.8
5	何となく嬉しくもつたいい思いである	185	60.9
6	人にこの信仰を伝えずにはおれない気がする	182	59.9
14	社会問題や政治問題にますます関心をもつ様になつた	45	14.8

とともに「社会問題や政治問題にますます関心をもつようになった」という者はわずか四五人（一四・八％）しかない。順位もずつと下つて第十四番目である。

これは先の調査結果を信者自身の表白によつて確証づけることになる。即ち真宗信者は一般に根本的な生死問題の解決を得て慚愧と感謝の念は深い。身を謙虚に持して聞法的態度を失わず常に身を省みる。と同時に胸にみちる法悦を人に伝えずにおれない気持から、境遇と力量の許す限り、教人信の実践をつづける。しかしそれは自己を中心とするごく狭い集団（家庭・職場・村落等）内に限られ、個人から個人への信仰活動にほとんどとゞまつている。第二次的集団或は近代的集団という意味の社会の構造に対する認識に暗く、従つてそういう意味の社会内に於ける信者自身の自覚が稀薄である。社会的実践に努力すべきだと少くとも信者の六者は考えていながら、再軍備・憲法改正・政党等の諸問題について具体的意見を何ら持ちあわせていない人達が激増する理由はこゝにある（第Ⅱ表、第Ⅲ表参照）更に具体的意見を書いた者の中でも、その理由を本質的な信仰の立場から述べている者が僅々三、四にとゞまるのも、回心によつて社会への関心が大きくなつたという者の少ないのも（第Ⅵ表参照）、理念的にはどうであれ現実的には、真宗信者の宗教意識と社会意識との間には強力な必然関係が見られないことを物語っている。「お念仏さえあれば、あとは自然にすべて解決される」という考えは相当根強いが、個人を超えた社会の問題までもそうなのかと問い直されることはなく、社会的態度としてはまるで安易な抽象論にとゞまつている。

更に厳しく批判すれば、信仰がいかなる意味にせよ実践に展開する者はまだ良いが、全くその一人の法悦にとゞまつていることも多い。例えば支持政党に対する無知、無関心は現代の政界に対する不信の表明でもあるが、又信仰を第一義とする真宗信者の人生觀或は生活態度にもよる。これが積極的に現れると世俗を超えた仏法の立場から、政治を浄化せしめようという努力になるが、大てい政治はいかになされても、社会がいかに変わつても、畢竟娑

婆に究極的な満足と安息はありえないと政治より逃避したり、社会から切離された個人の安心の中だけで生きるといふ消極的・閉鎖的態度に墮し易い。

五　　む　　す　　び

小論によつて明らかになつた点を要約すると、

一、真宗信者は社会問題を、信仰中心に考え、教人信的实践については比較的積極的である。

二、真宗信者の内向的性格は社会的には超越的態度をとらしめる。それは信仰の立場からする社会批判、世俗問題の輕視もしくは無関心という積極・消極二つの形で現われる。

三、「仏法ひろまれ」という意味の社会的実践と「世の中安穩なれ」という意味の社会的実践との内的連関や必然性が、理論的にも実践的にも、信者には自覺的に把握されていない。

四、従つて後者の意味の社会的実践の現代のあり方に対する反省が稀薄で、具体的・体系的な意見を持合せるものが少ない。

五、真宗信者の社会的態度は概して保守的であるが、それは信仰に由来する面よりも、信者の社会的・時代的諸条件に影響されている面が顯著である。

良かれ悪しかれ、以上の諸事実を今迄の真宗教団の機構と教化の信者への反映として受取るとき、教団としては深く考慮をめぐらすべき実に多くの問題をその中に蔵しているように思われる。

（本論文は昭和三十一年度文部省科学研究助成補助金による研究成果の一部である）